学苑・英語コミュニケーション紀要 No.774 55~66 (2005・4)

マーガレット・フラーとジュゼッペ・マッツィーニ

——人民とは誰か——

上野和子

Margaret Fuller and Giuseppe Mazzini
——Who Are the People?——

Kazuko Ueno

Abstract

This paper intends to clarify the idea of the People by Mazzini and Fuller's criticism for his republicanism. Mazzini was an Italian revolutionary and exiled to London when Fuller met him at Thomas Carlyle's house. Deeply moved by his cause, Fuller continued to give her support througout her life to the movement for a united republican Italy and the Roman Republic in 1849. Regardless of their shared sense of republicanism, however, Fuller began to discover Mazzini's idea of the People a little different from her and to realize he would not want to admit the existence of class struggle.

From *Giovine Italia* and his motto 'God and People', he developed his duty theory that a person's right shall be given after one performs one's duty, which seems morally Catholic. Though he acknowledged the benefit of industry and the progress of mankind as did Saint-Simon and Fourier, he exhibited a tendency to minimize class division. In developing his notion of the People, he appeared to include people of all classes, whereas, in fact, from his revolutionary plan he excluded the lower class and peasant folk, togethev comprising three fourth of population in Italy then.

Fuller asserted natural rights of all people from Protestant individualism. Fuller not only realized the radical change of social structure under industrial revolution but also learned such new theories as Fourier-system, and communism. Moreoven she came to understand the class struggle underlying in 1848 revolution in Paris, strongly conscious of the cries of lower class under the potato-famine and economic recession. Basically a transcendentalists, idealistic and romantic, while also being a feminist very realistic, Fuller became a radical, insisting on the bestowal of the natural rights of laboring classes on both Italian and American people.

はじめに

1848年，ヨーロッパに頻発した革命には，〈民衆の発見〉があった。本論では，イタリアの統一・独立運動に貢献したジュゼッペ・マッツィーニ（Giuseppe Mazzini, 1806-1872）の〈人民〉概念の理論と限界，それを批判したマーガレット・フラー（Margaret Fuller, 1810-1850）の共和主義およびフェミニズムの視点を考察する。フラーとマッツィーニの出会いは運命的であった。フラーはエマソンの紹介で，ロンドンの郊外チェルシーにトマス・カーライルを訪ねた時，マッツィーニに出会った。カーライルには自由放任の民主主義を嫌悪し，封建的社会を賞賛する姿勢がしばしば見られた。ある晩彼は大層機嫌が悪く，話題が「進歩」とか「理想」に関わった時，皆を「甘ったるい感傷ばか」

(rose-water imbecilities) とののしったことがあった。黒い僧服に身を包んだマッツィーニはいくらか反駁を試みたが，すっかり消沈して窓辺にたたずむのであった。フラーが，マッツィーニの悲願を本当に理解したのは，この時カーライルの妻ジェーンがフラーに語りかけた言葉からであった。それは，フラーがエマソンに宛てた手紙の中で以下のように再現されている。

> "These are but opinions to Carlyle; but to Mazzini, who has given his all, and helped bring his friends to the scaffold, in pursuit of such subjects, it is a matter of life and death." (Chevigny p355) (1)

それまでのイタリアは，オーストリア占領下のロンバルド・ヴェネト王国，パルマ公国，トスカーナ大公国，両シチリア王国，サルデーニャ王国やモーデナ王国，そして教皇領など小国分立，外国支配，教権的前近代的な統治に抑圧され，民族紛争はメッテルニヒの言葉どおり，単に地域の問題であった。事実上イタリアは，8つの異なる国に分かれていて，通貨も度量衡も，行政も，商業も，警察も異なり，贅沢な宮廷を維持し，貿易に高い関税をかけるため共通の市場もなかった。トスカーナを除いては，言論の自由，教育の普及，外国の書物や新聞の導入に敵意を抱いている専制君主に統治されていた(2)。それが19世紀半ば，マッツィーニ等の民族統一・独立運動によって，イタリアは初めて国際問題として浮上したのであった。イタリアの独立運動に身を捧げるマッツィーニに感銘を受けたフラーは，ロンドンのイタリア人学校を訪問するなど積極的に共感を示した。その後イタリアに渡ったフラーは，1850年マッツィーニの主導するローマ共和国樹立運動やその崩壊の際，ニューヨーク・デイリー・トリビューン紙上でアメリカに対してローマ共和国の支援を訴えただけでなく，フランス軍のローマ攻略の際には病院で負傷兵の看病をするなど，公私にわたってマッツィーニを支援し続けた。

しかし，フラーは，マッツィーニと同様にイタリアの共和制国家を望んだが，マッツィーニとは権利と義務の関係，そして革命における下層階級の参加についての意見が異なっていることを認めた。アメリカの独立を誇る共和主義者のフラーには，個人主義的傾向が強くあり，個人としての権利が自然権として考えられていた。それに対して，マッツィーニの義務論は，権利は成し遂げられた義務に対して与えられ，道徳的宗教的な色合いが強い。すなわち，個人としての輪郭はあいまいで，フラーや多くの識者の指摘するとおり，マッツィーニには下層階級が社会的役割を果たすようになってきたという認識が希薄であった。さらに道徳的な義務論から知識人の使命を強調するあまり，階級闘争という概念を避ける姿勢があった。マッツィーニの近代民族国家を目指した「青年イタリア」の創設は評価されるとしても，リソルジメント期のイタリア革命には下層階級の参加という点で，後進性と限界が認められる。

フラーについては，特派員となってからヨーロッパの政治体制や社会組織に対する理想が大きく飛躍した。イギリスやフランスにおける産業革命の過程をつぶさに見聞し，貴族社会の階級制度，労働者階級の増大，カトリック社会の矛盾を痛感するとともに，新しい思想である，フーリエ主義や協同社会主義(アソシエーショニズム)，共産主義の台頭をいち早く認識した。おそらくマッツィーニよりも民衆の窮状を理解し，民主主義の必要性を重要視していたにちがいない。

アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci, 1891-1931) は，著作『獄中記』(1949) において，1848年の市民革命，イタリア・リソルジメント運動を1789年のフランス大革命と比較し，イタリアでは何が実現され何が実現されなかったかを問い，以後リソルジメント研究の隆盛を招いた。グラムシによれ

ば，結局フランス革命と異なり，リソルジメント期のイタリアでは農業革命が遂行されなかったことを挙げている（3）（グラムシ　pp308－309)。1956年，ロザリオ・ロメオ（Rosario Romeo, 1924－1993)（4）は自由主義的歴史観からグラムシを痛烈に批判した。ロメオは，実証主義的分析から，とりわけイタリアにおけるジャコバン主義の欠如，リソルジメント期の農業革命の不可能性を主張した。その後の歴史学者スチュアート・ウルフ（Stuart J. Woolf, 1936－)（5）も経済構造論を唱えているが，いずれもグラムシの影響を免れていない。興味深いことにフラーはグラムシ同様，マッツィーニは社会全体を見ていないと批判した。マッツィーニを直接批判したフラーのエッセイは遺されていないが，それまでの言動を想起すると，フラーの「人民」およびデモクラシー概念を再構築することはできる。本稿では，フラーの共和主義的フェミニズムの視点から，マッツィーニの「人民」概念の特徴および限界を照射する。

第一章 マッツィーニ創設「青年イタリア」の近代性とその射程

マッツィーニは，フラーに会う以前の1831年，イタリアの統一・独立を掲げた共和派の秘密結社「青年イタリア」(Giovine Italia）を結成，スイスやマルセイユなどで亡命イタリア人仲間とイタリア各地の蜂起を画策した革命運動家であった。共和派の内部抗争や蜂起の失敗の後，ロンドンへ亡命していた。ここでは，「青年イタリア」の民主主義的な性格を論じるとともに，革命の目標が人民のために王侯貴族や教皇庁の統治する封建制度の改革ではなく，オーストリア等の外国勢力の排除へと偏向していく過程を述べる。

マッツィーニはナポレオン帝国下ジェノア（Genoa）の生まれで，父親はジェノア大学病理学の教授であった。はじめ法学を学んだが，彼は文学批評に向かった。特にダンテ，シェイクスピア，ゲーテを賞賛し，ルソーを始め多くの文芸評を書いた。その才能は後に英国滞在中，J.S. ミル，ロバート・ブラウニング，ディケンズ，ジョン・ラッセル卿など多くの知識人を惹きつけ亡命生活を支える柱になった。

ナポレオン失脚後，イタリアの多くの州はオーストリアに吸収され，特に1820年代には南部のシチリア島，ナポリでは軍人将校を中心として秘儀を重んじるカルボネリーア（Carboneria）が隆盛，各種の愛国主義運動が台頭した。1831年12月マルセイユで立ち上げられた「青年イタリア」は，イタリア史上初めて明確な政治綱領があり，近代政党の性格をもつものとして，歴史的に評価されている。

A．結社「青年イタリア」の理念と特徴

「青年イタリア」の政治宣言と言われる「一般教程」(1831年）の内容を，黒須純一郎著『イタリア社会思想史』(黒須　pp256－264)（6）から概観すると，当然ながら近代的で民主的な目標と，秘密結社ならではの運営面の規定が散見される。「青年イタリア」の目標は，それまでイタリア人亡命者に定着していた「団結」に対するアンチ・テーゼとして「自由・平等・人類・独立・統一」とし，特に「統一」は連邦主義型の解決に道を開いたものである。第一項では「青年イタリア」が「進歩と義務の法則」並びに「自由・平等」な人間による単一，独立の自主的国民を再生する偉大な計画を信ずる，「イタリア人の同胞団」と規定される。第二項は「地理的，言語的，行政的，司法的なイタリア」の規定であり，従来の地域的分権主義を打破し，「イタリア人全体」を「国民」に統一しようとするマッツィーニ計画の基礎を成すものである。第三項では組織の「政治目標を共和主義・統一主義である」

ことを明確にした。これは，「青年イタリア」が民主的な組織であることを明言し，秘儀を尊ぶカルボネリーアに対する痛烈な批判であった。「国民変革の指導者の位置を占めるものは，個人であれ，結社であれ，その意図する変革の傾向を知っていなければならない。人民を招集して武器を取らせようとする者は，その理由を説明できなければならない。国家再興の事業を企てる者は誰でも，信念を持たねばならない。もしその信念を欠いていれば，彼は騒乱の煽動者以外の何者でもないし，アナキーの促進者であって，騒乱に対策を講じ，それを終わらせる方法をもたない。」と謳った。第四項は，革命蜂起の手段を記している。つまり，統一共和国樹立の手段は「教育と蜂起」であり，これら二つの手段は同時に利用され，「蜂起」が将来イタリア国民性の萌芽を目指す計画を示さねばならない。「人民の形成を目的としているので，蜂起は人民の名において起こし，これまで無視されていた人民に支持されるだろう。従来のような外国勢力の依存を排除し，もちろん外国の事件を利用しながらも，また一階級だけ（ブルジョワ階級）の力に依存した過去の革命に対し全国民の力によらねばならない。さらに，彼は革命に対する段階規定で，〈蜂起の段階〉を〈革命の段階〉から区別する。〈蜂起の段階〉，すなわちその開始から大陸イタリアの全領土の解放にいたるまでのすべての期間は，少数者に集中された臨時独裁権力によって統治され，領土が解放されたとき，全権力は国家権力の唯一の源泉である国民会議の前に消滅しなければならない」。

第五項から第七項までの運営規定は秘密結社の相貌を顕わにしている。すなわち結社の財政的基盤，同志はすべて「社会金庫」(Cassa Sociale) に毎月50チェンテージモ（1チェンテージモ＝100分の1リラ）の分担金を支払い，なお余裕のある者は，加入の際定額以上の支払いを強制される。「青年イタリア」の旗，赤，白，緑の規定，加盟時の誓約書「神とイタリアの名において」，そして「中央指導部」の指揮と地方指導部間の連絡方法，刊行物の流布や一般的な行動計画の準備。地方同盟員と中央指導部との連絡，武器の調達，地域報告に関する事等。

従来の秘密結社を特徴づける神秘的な秘儀の規定はなく，裏切り者抹殺の義務もなく，カルボネリーアが，人間の人間に対する誓約の結社だとすれば，「青年イタリア」は，人間の原理に対する誓約の結社であった。ところで，「青年イタリア」も革命を目指す非合法の結社であったから，当然一定の秘密は守られなければならなかった。中央や支部組織の所在，各同盟員の実名も隠され，「戦士名」を用いた。さらに，同盟員はできるだけ1丁のピストルと50発の実弾を用意する義務を課された。こうした出費のための財政的な基礎は分担金の蓄積により，ファンドとなった。

B．マッツィーニのフランス革命の分析と「青年ヨーロッパ」

マッツィーニは，フランスの影響を排除する努力を見せながら，結局フランス革命の残虐性を避けることに腐心するあまり，外国支配の排除に傾き，国内の封建遺制の改革から逸れてしまった（7）。その原因は共和派内部の対抗勢力である，ブォナッローティ (Fellipo Michele Buonarroti, 1761－1837)（8）派の牽制もあったが，マッツィーニは実際の蜂起に失敗し「青年イタリア」は崩壊状態になる。しかし，ここで彼は次世代のヨーロッパ連合を期待させるような，「青年ヨーロッパ」を結成する。

彼はフランスの7月革命で主流となったヴィーコ (Vico)，コンドルセ (Condorcet)，サン・シモン (Saint＝Simon) の影響を受け，19世紀の時代を「原理の時代」とし，民衆という概念を導入した。マッツィーニによれば過去の革命は，「平等」という言葉を人民に投げつけずに，「人民」を恐れたのである。革命は，「人民のために人民によって行い」，「人民の先頭に立つ純粋な犠牲を好んで求める

青年」が必要である。しかし大衆を革命という行動に駆り立てるには，物質的利益を公然と説明する必要がある。物質的な利益は，「野蛮人に対する戦争」によって生み出される。「野蛮人とは，彼らが礼拝する光の上に，呼吸する空気の上に課税する収税吏である。交易や，自由を妨害するスパイである」。ここにはイタリア人民が置かれている封建制に対する認識があるが，さらに重要なことは，人民の貧困理由が，いつしか「野蛮人は出て行け，オーストリアに対する戦争を」というスローガンに収斂されてしまうところにある。多くの研究者が指摘するように，ここにマッツィーニの「人民」概念の限界があった。すなわち「最も多数で最も貧しい階級」というサン・シモン主義の概念に留まり，決して都市や農村で封建遺制による重層的な抑圧にあえぐ現実の人民を視野に入れたものではなかった。

また，マッツィーニはフランス大革命のジャコバン党恐怖政治のイメージを払拭し，人民に利益をもたらす革命の宣伝を努める。当時「革命」という語には，農地均分法，人権略奪，家族的所有の強奪，即座の簒奪，暴力という救済策を髣髴とさせた。現にフランスでは，1793年大革命の被追放者の息子たちが生き残り，リヨン，アラス，ナントの残虐な思い出が生々しくあり，すべてを無に帰すその残忍さは〈共和制〉という名称に不信の念を抱かせた。マッツィーニは「殺戮や簒奪と共和制は同じ」という宣伝を「歴史的事実の捏造」であるとして，イタリアとフランスの違いを強調し，共和主義者ブォナッローティ派を牽制した。

しかしながら「青年イタリア」は，1833年4月，34年2月の第一次，第2次サヴォイア遠征計画の是非をめぐって，ブォナッローティ派と対立した。マッツィーニは，フランス在住のイタリア人亡命者のゲリラ部隊を組織し，サヴォイア攻撃からジェノア，ピエモンテの蜂起を目論んだ。しかしブォナッローティは，革命運動が全般的に沈滞しているという判断から，亡命者に対して無謀な蜂起計画に加わらないよう警告した。こうして両派は完全に決裂した。それでもマッツィーニは，ドイツ人，ポーランド亡命者，フランス人の協力を得て，この遠征計画を実行しようとしたが，兵員徴募の失敗，指揮官の裏切り，「青年イタリア」内部での意見の不一致のため遠征計画は無残な結末をむかえ，「青年イタリア」の組織も瓦解した。1833年のクーデターでは，カルロ・アルベルト王により12人が絞首刑，100人以上が投獄され，何百人もが国外に逃亡。マッツィーニも官憲から逃れたが，家族の家の前で死刑を宣告された。その後彼はフランスから追放されたが，常に賛同者に囲まれ，1833年7月からジェノアに本部をおき活動した。

マッツィーニはこの時の教訓を構想に入れ，1834年亡命地スイスのベルンで「青年ヨーロッパ」を結成する。これは，非抑圧民族の連帯による人民のヨーロッパ再生を願うものであった。人類と個人の自由を求めるために，「国民性」が介入するマッツィーニ思想の根幹となる協同社会観（La associazione）がここで成立する。彼は「青年ヨーロッパ」を中核として，ヨーロッパ諸人民の国民的な合意を前提に，「未来のヨーロッパ連邦」を形成しようとする。組織化の思惑はギリシャからハンガリーまで限りなく拡がっていったが，結果的に，「青年ヨーロッパ」に加わったのは「青年ポーランド」「青年ドイツ」であり，「青年スイス」と連動した。しかし，1830年代にスイスから追放されたドイツ人ブライデンシュタイン兄弟（Breidenstein）はイギリスからアメリカへ亡命し，運動を続けた。1844年「青年アメリカ」（Young America）と呼ばれる秘密共産主義者同盟が創設され，ヨーロッパの義人同盟などに財政的援助を行っている（9）。ともあれ，国民国家の固有の利益を前提にした，人民に基づくヨーロッパ共同体の構想は，抑圧された後進国諸民族の知識人による最初のインターナショ

ナルの提唱であった。

第二章　フラーと2月革命，そして階級意識

1846年，イギリスに渡った当時，フラーは社会問題を深刻なものと捉えていたが，革命という手段を考慮するまでには至らなかっただろう。しかしクエーカー教徒で，フーリエ主義者，奴隷廃止運動など広範な活動を展開しているスプリング夫妻との旅行は，フラーに絶大な影響をもたらした。もちろん，ニューヨークのスラム街ファイブ・ポインツ地区にも行ったフラーであるが，マンチェスターやリバプール，女性も子供も働く炭鉱の見学，それにフランスのパリ，リヨンなど新興工業都市の形成に目をみはると同時に，悲惨な労働者の状況に緊急な改革を求めずにはいられなかった。また1846年，1847年のヨーロッパを襲った飢饉，イギリスでは，ほとんどすべての工業地帯，特に大都市へ押しよせ，そこで人口の最下層階級を形成しているアイルランド移民 (10) (エンゲルス　p142)，失業と倒産，政治と企業家の汚職が蔓延するパリを経験したフラーは，次第に民衆の運命を拓く道を模索していった。

パリの滞在は限られたものであったが，フラーは2月革命の本質を，民衆の行動を理解できるようになっていたはずである。フラーが最も影響を受けたのは，社会主義者で小説家のジョルジュ・サンド (George Sand, 1804－1876) であった。また，フラーは社会主義者でフーリエ主義者コンドルセ，シャンソニエで自由主義者ベランジェ (Pieerre－Jean Beranger, 1780－1857)，カトリック教の破戒僧ラムネ (Felicite Robert Lamennais, 1782－1854)，過激なサン・シモン主義フェミニスト，ポリーヌ・ロラン (Pauline Roland, 1805－1852) (11) などとパリで会っている。しかも彼らすべてが2月革命では，国家的に重要な役割を果たした。したがって社会主義者ルイ・ブラン (Louis Blanc, 1811－182) のことも聞いていただろう。パリの2月革命は，ヨーロッパ全域を震撼させた1848年革命の事実上の発火点であった。すでに国民国家を形成していたフランスでは，統一国家や民族独立が問題の焦点となったドイツ，イタリアや東ヨーロッパの諸地域とは異なり，政治改革を超えた社会構造の変革をめぐって革命が進展していった。2月の臨時政府に，ルイ・ブラン (11) や労働者階級のアルベール (Albert：本名 Alexandre Martin, 1815－1895) が入閣したことは，革命の性格を象徴的に物語っている。ちなみにフラーが「フランスの偉大な国民抒情詩人」(the great national lyicist) と敬意を表しているベランジェも，またはじめは敬愛していたトクヴィル (Alexis de Tocqueville, 1805－1859) やバロ (Odilon Barrot, 1791－1873) も国会議員として選ばれている。2月革命の目標は，労働者階級を含む国民統合の問題として提起された。選挙改革宴会に対する弾圧が直接的な契機となった革命は，普通選挙を主張していた共和主義者たちが，その実施の延期を求めるほど革命の社会的基盤が整備されていなかった。しかし，社会主義者ルイ・ブランにとって，労働者の貧困や失業などの「社会問題の発生」に起因する革命は，歴史の必然であり，新しい社会改革の展望に革命の成否がかかっていた。もはや共和制自体は問題ではなく，民衆にとって政治改革は社会改革の目的に達する手段にすぎなかった。しかし臨時政府の中で多数派であるブルジョワ共和派にとって共和国の到来が進歩の極限であるとすれば，共和制の方向をめぐる根本的な対立は不可避なものであった。結局，ルイ・ブランの約束した「労働権」(droit au travail) と国立作業所 (ateliers nationaux) は，本来の目標とはまったく異なる失業対策となって，臨時政府の財政を圧迫し，4ヵ月後にはブルジョワ共和主義者との大激論の末解散されてしまった。この事件からマルクスは，「革命を階級闘争として再定義する」こととなり，

「ブルジョワ共和制は，結局ひとつ（ブルジョワ）の階級がもうひとつ（労働者）の階級を征服する専制主義」と解釈した(12)。(マルクス　p366，括弧内筆者注)

フラーは，2月革命をマルクスのように階級闘争として理解しなかったが，イタリアではパリにおいてより，さらに基本的な事柄を学んだと言えるかもしれない。実際，イタリアの政治闘争を，アメリカの独立戦争と同様，パリの社会理論や階級闘争を評価する前に体験することとなった。1847年にフラーがイタリアに到着してから，1849年の中頃までリソルジメント運動，国家復興運動は加速化した。それまでは穏健派，主に神父ヴィンチェンツォ・ジオベルティ（Vincenzo Gioberti）のロマン主義的で理想化された教皇を頂いた国家連合という考えが一般的であった。しかし1848年の教皇による改革，暴動，そして民主主義的な改革を要求する人々の声は，穏健派の実行できる範囲を超えてしまった。統一国家を要求されてローマ教皇ピウス9世はガエータへ逃亡，1849年サルデーニャ王カルロ・アルベルトは退位を余儀なくされた。1850年2月，マッツィーニを筆頭にした3頭執政官のローマ共和国の創立は，イタリア全土の若者たちに愛国心の炎を燃え上がらせた。

ヨーロッパの社会不安が危機感を煽ったのは確かであるが，フラーがアメリカで感じていた不公平感というものに，社会的身分として名前がつき，希望のない階級，あるいは階級分離が明確に映るようになった。おそらく当時のアメリカの中産階級の人間と同じく，フラーもそれまで〈階級〉という言葉で，この社会変革を構築できなかったに違いない。だが，マッツィーニの情熱やイタリアの革命体験は，フラーに近代社会の進むべき方向に具体的な名前を提供した。

改めてここで，フラーの階級理解を検討すると，フラーにはロマン派的共和主義の光と，同時にフェミニストとしての現実主義的な影が浮かび上がってくる。フラーのフェミニズムには，特筆すべき長所がふたつあった。第一に，彼女は女性として生活の困難を現実に知っていた。共和党議員であった父親は退職後，グロトンで家族農場を始めた。フラーは，精神的にも肉体的にも過酷な肉体労働の本質を，ここで体得したのであろう。ブルックファームを訪問したことはあっても，運営には参加していない。また，エリート男性以上の教養を授けられたフラーは，26歳で父親を失った時，母親と4人の弟妹がいた。女性に職業の道が狭められていた19世紀のアメリカである。この時の経験がフラーをしてフェミニズムに目覚めさせたことは十分考えられる。第二に，フラーは異なる階級や人種の人とも勇敢に接することができた。彼女はチャニング牧師とニューヨークでシンシン刑務所に行き，女刑囚と話をしているし，1843年，中西部のインディアン部落（ママ）で先住民族の女性たちと交流している。2月革命直後，フランスの普通選挙のために女性立候補者にジョルジュ・サンドを立てようとした労働者階級の女性の政治活動家たちに対して，サンドが身の危険をおもんばかってか，激しく厳しい調子で反対したことについてフラーはこう述べている。

> They hold their clubs in Paris, but even George Sand will not act with women as they are. They say she pleads they are too mean, too treacherous. She should not abandon them for that, which is not nature but misfortune (13). (*TSGD*　p245)

フラーのフェミニズムは，個人として人々に接することになるが，そのロマン主義的な共和主義から，「民衆」を革命の主人公に据えたジュール・ミシュレ（Jules Michelet, 1798－1874）やダニエル・ステルン（Daniel Sterne＝Marie Dague）と同様，「社会の進歩」とそれを担う「民衆」という考えに根本的に合致していた。そのような意味で，フラーはトクヴィルのいう，コモンマンを信じたアメリ

カ人であった。したがって，マンチェスターで酒場の女性労働者を垣間見，リヨンで女工と話す機会があった時，フラーの脳裏には，女性という無産階級が透けて見えていたのではないだろうか。

第三章　マッツィーニ　－神と人民と－

マッツィーニのロマン主義的な共同体のヴィジョン「神と人民と」というモットーは，政治的には曖昧なものであった。マッツィーニは，1836年３月「知識人の連合」(Asssociazione degl'intelletto) を推奨し，「若干の社会学説について　－フーリエ学派」(Di alcume dottrine sociali, Scuola Fourierista) において，フーリエ主義を批判している。彼はサン・シモンやフーリエ同様，進歩史観をもち，19世紀においては生産を増大し，消費との間に，当時は存在しなかった一般的均衡関係を確立するため，最良の策であるフーリエ主義を評価するが，義務の法則が，信仰の力を持たない限り，要するに，彼らにおいて道徳的変革がおこなわれない限り，人民の貧困に対して，彼らの階級は冷淡に無言で通りすぎるであろうと考えた。つまり，マッツィーニはフーリエ主義の産業至上主義が，自由競争を賛美する自由主義経済学派同様，その根底においてベンサムの功利主義的基礎を共有していることを厳しく批判したのであった (14)。

また，マッツィーニにとって，批判の対象となるキリスト教とは，常に個人主義的なプロテスタンティズムであり，その一方でグレゴリウス７世とルターを，教皇制と自由で独立の人間精神を和解させようとするカトリシズムに，好意的であった。1841年から60年にわたる一連の「人間義務論」には，彼のイデオロギーの核心がある。すなわち「自然権を説く哲学体系全体が暗黙のうちに否定された代わりに，彼の宗教的，倫理的色彩の濃い神の概念が置かれている。」そこでは「継続的に無限の進歩を遂げるウマニタ［人類の連帯　筆者注］を媒介として，神は自らの啓示を行なう」のである。(ウルフ p542) ここで示される個人は明確な輪郭をもたず，むしろ全体の中に溶け込んでいる。この関係は，フラーが初めてローマで教皇ピウスⅨ世が信徒に祝福を与えている光景を目にして，あたかも「父と子のようだ」といっているが，おそらくマッツィーニの思い描く人々もそのようなものであっただろう。前掲書の著者黒須氏も，知識人の義務という観念はマッツィーニの人民に対する「不信，焦燥」を表し，彼自身は「すでにヨーロッパ後進地域においても発生しつつあった労働者階級の自立的役割に対する理解が不十分」であったことを示す（黒須　p301）と述べている。道徳的な義務の理論から，権利は成し遂げられた義務に起源を持つという彼の理論はむしろ宗教的な意味あいが濃い。「個人主義を非難するマッツィーニにとって，人々を大衆として考慮することは進歩的なことであった。しかしながら，階級を分析する場合，それは反動的な考えであった。マッツィーニにとって，階級闘争は，人民という理念において非道徳であり不正義であった。つまり，彼の共和主義的愛国主義は，階級の差異を縮小化し，国家の性格を基本的にはブルジョワ社会と規定することだった。彼は人民という言葉を，国のすべての階級を示すために使用したが，たいていは中流階級，中流下層階級と小売商を意味し，彼らの下部にくる労働者階級は排除した」(Chevigny　pp369－370)。さらにイタリアの６割をしめる農業人口は不問に付された。

第四章　フラーとマッツィーニ　－共和主義の形成－

マッツィーニの〈人民概念〉は，フラーを以前にもましてローマの庶民に注目させた。実際フラーは，イタリアの下層階級，農民などにおける政治意識の欠如や権力者に対する恐怖を語っている。し

かし，マッツィーニの長い亡命と革命の展望が，国民の社会闘争や漸次的移行を過小評価させたのに対し，フラーの超絶主義的な個人の修養という理想が集団に向けられた時，おそらくマッツィーニより過激な社会改革，社会革命を要求する姿勢を与えたのではないか？

マッツィーニや共和派への信奉は強かったフラーであるが，1848年の春，批判的な態度を明らかにした。トリビューン紙で，フラーはパリの2月革命における「労働者階級」の「高潔さ」，政治革命と社会的革命の合体を耳障りなまでに称揚している。パリにおける階級闘争を是認し，フラーはユートピア社会主義やマッツィーニによって否定された方向を公然と主張した。イタリア共和主義者の精神を見習い，アメリカ人に革命を生み出そうと勧めた。パリの革命，階級闘争は，アメリカ人にとって大規模な変革を要求する不吉なモデルなのだ。彼女は祖国の人々に，「どのように民主主義を構築するか，先見的智恵として獲得する時である」と促した。フラーはアメリカの読者に向かって，〈兄弟愛〉〈平等〉から真の〈民主主義〉へと導き，国家の本来の貴族である，唯一真実高潔な，「労働者階級」を敬愛し護ることを学ばなくてはならないと，述べた。

> Those tremendous problems MUST be solved, whatever be the cost! … To you, people of America, it may perhaps be given to look on and learn in time for a preventive wisdom. You may learn the real meaning of the words FRATERNITY, EQUALITY: you may, despite the apes of the Past, who strive to tutor you, learn the needs of a true Democracy. You may in time learn to reverence, learn to guard, the true aristocracy of a nation, the only really noble－the LABORING CLASSES.（*TSGD*, p211）

次の特派員報告でフラーはマッツィーニを直接批判している。「彼は，壮大な政治解放を目指しているが，すべてをみていない。…私は今，共産主義の要求，フーリエ主義の学説，などは単なる先駆けにすぎないと言うにとどめておく」。フラーが2ヶ月前にロンドンで出版された『共産党宣言』を読んでいるとは思われないが，ミラノでのマッツィーニのニュースに反発したと考えられる。1848年4月19日，マッツィーニが「栄光の5日間」の後ミラノへ帰還した。「仕立て業の代表者たちが労働条件の改善を要求してマッツィーニに接触した時，彼はイタリアのさらに大きな闘争のために彼らの困難を今しばらく辛抱するように主張した」とされている（Chevigny p382)。

> It is a glorious time for the exiles who return and reap even a momentary fruit of their long sorrows. Mazzini, too, has been able to return from his seventeen years' exile, when there was no hour, night or day, that the thought of Italy was banished from his heart－no possible effort that he did not make to achieve the emancipation of his people, and with it the progress of mankind. … And yet Mazzini sees not all: he aims at political emancipation; but he sees not, perhaps would deny, the bearing of some events, which even now began to work their way. …Suffice it to say, I allude to that of which the cry of Communism, the systems of Fourier, & c. are but forerunners.（*TSGD* p224－225)

第五章　ローマ共和国の創生と崩壊

フラーはローマ共和国の創生と崩壊の証人となった。ローマ共和国の危機において，マッツィーニ

もフラーも，あくまで愛国精神に貫かれた共和主義を主張した。マッツィーニは，ローマが全世界の中心的な役割を果たした歴史的事実を喚起しイタリアの優越性を主張することで人々を誘導しようと試み，フラーはアメリカ人に対し，アメリカの独立戦争がイタリアのモデルになるために支援を要請した。教皇ピウスⅨ世が去ってから，フラーはローマ市民が徐々に市民として政治にめざめ，自主的な行動に移っていくのを見逃さず，その意味ではロマン的な民衆観を保持し続けた。

> The responsibility of events now lies wholly with the People and that wave of Thought which has begun to pervade them. Sovereigns and Statesmen will go where they are carried; it is probable influence will be changed continually from hand to hand, and Government become, to all intents and purposes, representative. (*TSGD*, p229)

1849年2月8日，ローマ共和国樹立の宣言が報道され，さらにローマ憲法議会の基本条例が始めて英語で翻訳されトリビューン紙を飾った。「多くの人々がカンセルリーア広場につめかけた。夜の1時に共和国発布の宣言が決議されると一斉に人々が走り去って，まもなく町中の鐘が鳴りはじめた」とフラーは書いた。ローマ憲法議会は，宗教的な独立を教皇権に認めながら政治的な権利は否定し，純粋な民主主義をいただくローマ共和国を宣言した。フラーは，アメリカと同じような体験が繰り広げられているとき，自分の祖国も気高い共感を示してほしい。と記事に書き，ローマ共和国の困窮，特に財政と外交問題，貨幣の流出を嘆いた。

フラーはイタリア在住中，マッツィーニの他，二人の有名な過激派の貴族の夫人と友好関係を結んだ。ひとりはコンスタンツァ・アルコナティ・ヴィスコンティ（Costanza Arconati Visconti, 1800－71）公爵夫人(15)。もうひとりはベルジョヨーゾ侯爵夫人（Principessa Belgioioso）(16)であった。ベルジョヨーゾ侯爵夫人は反オーストリア運動の活動家であり，領地内にフーリエ主義実験農場を営み，学校や工場を運営していた。大変美しく数人の愛人がいるとか，イタリアの3色旗のドレスを着てオペラ座に現れて物議をかもし出す人物だと言われていた。

しかし，1849年3月，革命の消えゆく火が再びヨーロッパを覆った。イタリアではサルデーニャ王カルロ・アルベルトがまたオーストリアとの休戦を破り戦ったが，11日後にクストーザでラデツキー将軍に敗北し，イタリア穏健派の危機を誘発した。その間ガエータに逃げた教皇は，密かに近隣の公国と手を結び介入を伺っていたが，4月にはナポリ軍とオーストリア軍が南部と北部からローマに進軍し，スペイン艦隊は西方からティレニア海を進んでいるという具合であった。フラーは，フランス軍が1月に介入してくると睨んでいたが，マッツィーニを含む他の人々は，ルイ・ナポレオンが若い頃カルボネリーアの一員だったことを思い出し，安心したがっていた。フラーの勘は当たっていた。というのは，フランスは，ローマでの早い勝利がカトリック世界の支持を確保する手堅い手段であると判断したからである。それ故，表向きは治安維持と称して遠征隊をチビタ・ヴェッキア（Civita Veccia）へ送り，4月30日，フランス軍はローマを攻撃した。ガリバルディ（Giuseppe Garibaldi）の軍に押されてフランス軍は一旦海岸線まで退却したが，致命的なほど楽観的なマッツィーニの指示によりガリバルディは，それ以上後を追わなかった。その夜，フラーはベルジョヨーゾ侯爵夫人からのメモで，チベル川の島にあるファタ・ベネ・フラテルリ（Fate Bene Fratelli）病院の監督を任された。

ガリバルディのゲリラ隊が，ナポリ軍を追い払っている間，マッツィーニはフランス軍の時間稼ぎに躍らされて，レセップス将軍（Lesseps, Ferdinand－Marie）と2週間にわたる交渉に入った。フラー

は，そのトリックを見抜いて「フランス軍の茶番の第二幕」と呼んだが，ローマ市内の戦いはますます激しくなった。1849年8月28日，チャニング宛の手紙で，以下のように嘆いている。

> I knew not how to bear the havoc and anguish incident to the struggle for these principles. I rejoiced that it lay not with me to cut down the trees, to destroy the Elysian gardens, for the defense of Rome; I do not know that I could have done it. And the sight of these far nobler growths, the beautiful young men, mown down in their stately prime, became too much for me. (Hudspeth, V. p258)

ローマ共和国はフランス軍に降伏を決めた。ガリバルディと彼の軍隊が去った7月2日の翌々日，7月4日にフランス軍は，ローマ市内に入場。マッツィーニは一週間ほど自由に市内を歩き回っていたが，ほどなくアメリカ公使キャスの支援でヴィザを取得し，ローマを脱出しイギリスへ亡命した。もちろん，その陰にはフラーの大きな協力があったことは知られている。フラーはマッツィーニとの最後の会見をR.W. エマスンに以下のように伝えた。

> Mazzini had suffered millions more than I could; he had borne his fearful responsibility; he had let his dearest friends perish; he had passed all these nights without sleep; in two short months, he had grown old; all the vital juices seemed exhausted; his eyes were all blood-shot; his skin orange; flesh he had none; his hair was mixed with white; his hand was painful to the touch; but he had never flinched, never quailed; had protested in the last hour against surrender; sweet and calm, but full of a more fiery purpose than ever; in him I revered the hero, and owned myself not of that mould. (Hudspeth, V. p247)

むすび　－イタリア・リソルジメントの遺産－

理念としての〈人民〉は，マッツィーニにとってはあくまで抽象的なものであり，そのカトリシズム的義務論は，啓蒙思想の自然権（natural rights）を主張するフラーの共和主義とはおのずから相容れないものであった。しかしその行政政策は，彼が目指した〈人民〉のための共和主義で貫かれていた。ローマ共和国の様々な民主的な行政政策の計画には，身分も裁判上の差別も撤廃し平等を目標とした普通選挙，また立法，行政，財政面の統一を強制的に実行するものもあった。教会裁判所が廃止され，宗教上の平等が宣言された。教会所有地の没収を行い，それらを小自作農地に分割する布告が出された。臨時革命政府の提案した政策の多くは，時間的余裕があまりにも短かったため実現されなかった。1848年，1849年のヨーロッパの革命期に最も民主的な内容をもつローマ共和国憲法は，1849年7月になってやっと布告された。ちなみに共和国が崩壊するのがこの時期であり，ヨーロッパ各地で失敗した革命と同様に，その意味で象徴的であった。しかし，これらの経験を通じて人々は，専制政治に代わる民主的な道があることを学び，革命の挫折後もその希望の火は燃え続けることとなった。

注

(1) Chevigny, Bell Gale: *The Woman and the Myth: Margaret Fuller's Life and Writings* (Boston, Northeastern University Press, 1994)

(2) スチュアート・ジョーゼフ・ウルフ著『イタリア史　1700－1860』鈴木邦夫訳　法政大学出版　2001年　第

十，十二章参照。

(3) ディヴィド・フォーガチ編『グラムシ・リーダー』東京グラムシ研究会監修・訳　御茶の水書房 1995　pp308－309

(4) Rosario Romeoには以下の著作がある。*Risorgimento e capitalismo* 1998, *Il Risorgimento in Sicilia* 2001, 4a ed., *Vita di Cavour* 2004.

(5) Stuart J. Woolf　ロンドン生まれ，ケンブリッジおよびレディング大学で教鞭をとる。他の著作には『ナポレオンによるヨーロッパ統合』『ヨーロッパのナショナリズム』がある。

『イタリア史　1700－1860』（鈴木邦夫訳　2001　法政大学出版局）においてリソルジメント期の革命でイタリアの農村が立ち遅れた理由としてウルフは，マッツィーニが革命の中で農民を無視しただけでなく，当時の農村社会の構造変化を理由としてあげた。つまり人口の増大と，王政復古期に高収益になった農産物価格の低落傾向が続いたこと。農産物価格は，リソルジメント期を通じて先進的な農業を展開する国家と競い合う過程で下落し，国内農業の状況を一層悪化させた。しかも地主が，農民を都市で展開する政治運動から隔離するという点で一定の役割を果たした。（PP486－500）

(6) 黒須純一郎著『イタリア思想史』　お茶の水書房　1997　pp258－264

(7) 前掲書において，黒須氏は，「マッツィーニの根本思想は機関誌『青年イタリア』（1832年3月）第1号，第2号，第3号の中で微妙に変化する。」（同上，p267）と述べている。

(8) ブォナッローティ　フランス革命総裁政府の下，1796年「バブーフの陰謀」の首謀者のひとり，欧州的民主主義，社会主義革命の指導者，「ネオ・バブーフ主義の理論家」。1833年「真のイタリア人協会」（Societa dei Veri Italiani）と「青年イタリア」は協定を結び，協力することとなった。

(9) 的場昭弘・高草木光一編『1848年革命の射程』　御茶の水書房　1998　p9

(10) エンゲルス著『イギリスにおける労働者階級の状態』上　浜林正夫訳（新日本出版　2000）p142　原題 *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, 1845

(11) Pauline Roland, フラーのエッセイ「ニューイングランド文学の夜明け」を仏訳した女性。

(12) マルクス著『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』伊藤，北条共訳，岩波文庫　p366
原題　*The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte,* 1852.

(13) Margaret Fuller: *"These Sad But Gloious Days" Dispatches from Europe 1846－1850* edit.Susan Belasco Smith（*TSGD*と略記）（New Haven & London, Yale University Press, 1991）

(14) 黒須の前掲書における「マッツィーニの共同社会観の形成」（第二章）の4（pp297－303）参照。

(15) コンスタンツァ　アルコナティ　ヴィスコンティ　Costanza Arconati Visconti（1800－71）公爵夫人，彼女ははじめ穏健派ジオベルティを推していたが，26年間の亡命生活から帰還しフィレンツェに住んでいた。13世紀から15世紀にかけてミラノ，ロンバルディアを支配していた名家ヴィスコンティ家の夫人。

(16) ベルジョヨーゾ侯爵夫人 Principessa Belgioioso　フラーの伝記を書いたDiessは，彼女のことを'a sophisticated, aristocratic, strangely beautiful, European Margaret Fuller... she was the fantasy Margret Fuller of the real Margaret Fuller'と書いている。Deiss, Joseph J. : *The Roman Years of Margaret Fuller*（New York, Crowell, 1969）

（うえの　かずこ　　人間文化学科）